

#002 お天気雑記帳

『日本書紀』

(夏の雪)

『日本書紀』推古天皇34年(626年)に、不思議な気象の記録が残っています。「三月に霜降る、六月に雪ふれり」、現在の暦で「4月に霜が降り、7月に雪が降った」というのです。はたして、本当なのでしょうか？

三十四年の春正月に、桃李、花さけり。三月に、寒くして霜降る。……六月に、雪ふれり。是歳、三月より七月に至るまでに、霖雨ふる。天下、大きに飢う。

(34年の春正月に、桃や李の花が咲いた。3月になると寒くなり霜が降りた。……六月に雪が降った。この年は3月から7月まで雨が降り続き、各地で大飢饉が起きた。)

「4月の霜」は、それほど珍しい現象ではありません。都があった奈良県の明日香村に近い宇陀市で、「5月5日(1991年)」に「最低気温-0.5℃」の記録もあります。しかし、「7月の雪」はとても信じられません。富士山の記録かもしれません。明日香村の記録だとしたら、寒気が流入して大気が不安定になり、活発な積乱雲が発生して霰や雹が降り、地面が白くなった姿を「雪ふれり」と記述したのかもしれない。

甲府気象台で富士山の初冠雪(その年の日最高気温が最も高かった日以降の積雪)を観測しています。平年値は「9月30日」ですが、過去の記録(1894年～)を調べると「8月9日(2008年)」という驚くべき記録がありました。この日、関東甲信地方の上空に非常に強い寒気が流入し、甲府で直径12ミリの雹も降りました。第2位以下の記録が「8月12日」「8月17日」「8月21日」……と続いています。富士山の「8月の雪」は、四半世紀に一度程度の頻度で観測されています。時代をもっと遡れば、「7月の雪」があったとしても不思議ではありません。

『万葉集』に、富士山の夏の雪を詠んだ歌が載っています。

不盡の嶺に降り置く雪は六月の

十五日に消ぬればその夜降りけり 山部赤人

(6月15日に富士山の雪が消えたと思ったら、また、その夜に雪が降り積もったそうだ。)

鎌倉時代の僧、仙覚の『万葉集注釈』に、「富士の山には雪ふりつもりてあるが六月十五日にその雪のきえて、子の時よりしもには又ふりかはると駿河国風土記の見えたりといへり」と、あります。この山部赤人の歌は、実景を詠んだのではなく、『駿河国風土記』を引用して詠んだよう



2008年8月9日、富士山初冠雪

です。『駿河国風土記』が現存しませんので詳しいことはわかりませんが、夏に雪が降ったのは間違いないと思います。

(甘露)

天武天皇7年(678年)10月に、「甘露」が降ったという記録があります。『広辞苑』に「甘露:中国古来の伝説で、王者が仁政を行えば、天がその祥瑞として降らすという甘味な液」の解説がありますが、『日本書紀』の「甘露」は、これとは違うようです。

冬十月の甲申の朔に、物有りて綿の如くにして、難波に零れり。長さ五六尺ばかり、広さ七八寸ばかり。則ち風に随ひて松林と葦原とに飄る。時人の曰はく、「甘露なり」といふ。

(冬10月1日、綿のようなものが難波に降った。長さ約1.5m、幅約25cmで、風に乗って松林と葦原でひるがえっていた。人々は「甘露である」と言った。)

晩秋の穏やかに晴れた日、小さなクモが尻から出した糸を上昇流に乗せて、空高く飛びあがることがあります。昔、自然が豊かなころには、たくさんのクモが空に舞い、クモの白い糸が綿毛のようになって空から降ってくる現象が、各地で観察されました。今、街中でこんなクモの糸のかたまりが飛んでいたら、全国ニュースになると思います。『日本書紀』の「甘露」は、この現象のようです。

この現象は、英語で「ballooning」、中国語で「遊糸」。日本では「いとゆふ(糸遊)」と言います。北国の山形では晩秋のころのこの現象を「雪迎え」とも言うそうです。これらの季節感あふれた美しい言葉も、今は死語になってしまいました。



気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭